

カタストロフ。ある事故調査報告

志村 良知

生家の庭に面したガラス戸にくっきりと鳥の衝突痕が残っていた。機体（鳥）は約四五度のバンクをとって右急旋回中、全く予期することなく進路上にあつたガラス戸に衝突した。

頭部の衝突痕がわずかだが胴体部の衝突痕より上にあること、胴体は鉛直に近く、主翼のみ右に傾けてかつ迎え角を取っていたことがわかる痕から、衝突時の飛行状態は水平飛行や降下中ではなく、右旋回しながら頭上げ、主翼前縁上げ姿勢で、着陸のホバリングに入る直前の態勢だったと推定される。

最初に頭部が、続いて重い胴体部が頭部を胴体内にめり込ませながら衝突。機体は慣性によりさらに押し潰されると同時に、ガラスに押し付けられた頭部を支点に逆上がり状に回転し、胴体後部に収納された降着装置（脚）や尾翼（尾羽）に至るまで全身が貼りつくようにガラス面に接触。

右旋回中だった為、最初にガラス面に接触した左翼が胴体質量の慣性に引つ張られ、翼前縁のみならず、フラップロン（風切羽）の後縁までも内翼から外翼までわずかであるがガラスに接触している。最後に衝突した右翼も前縁だけであるが、翼端まで当たっている。衝突後お

そらく大きく跳ね返ることなく、運動エネルギーの大部分を機体内部構造の損傷、ガラス戸の震動ならびに衝撃音に使って停止した。この家の住人の証言によると、轟音は夜間であった事から、原因は『かもめのジヨナサン』に触発されての夜間訓練飛行中のパイロットが、外灯の写り込みを誤認し、着陸点をガラスの向こう側に設定した為と思われる。

翌朝の現場検証で、衝突した機体は僅かに散らばる外板部品（羽根）から山鳩と推定できた。しかし残骸やオイルや燃料の散乱もなくこれは不思議、と思つているところに舌舐めずりのニコニコ顔でこの家の猫五匹が現れた事からその後の事態も想像できた。動けなくなった墜落機体はこの家に所属の救助隊ならぬ巡視警備隊に回収され、どこかで解体処理されたものと思われる。

